

# 郷土の古文書

## 「その 26 ところ芋掘り<sup>ニ付</sup>相談のため集会廻状」

### 解 説

これは天保二年に戸倉村村役人の筆頭として上田國次郎より、組頭全員に廻した廻状です。

天保年中は天候不順で、近隣周辺の村々でも農作物の収穫が激減、物価は高騰し、村人の中には食べるのも困るものが出ていました。当時の市内に残る古文書、五日市の商人油屋重兵衛の日記によると、毎日のように雨が降り続いて市も休む状態であることや、頼母子講の日掛けの集金も休むこと、また、夏だというのに綿入れを着るような寒さと書かれており大変な冷夏でもあったようです。

戸倉村でも同じ状況で、すでに隣の村々ではところ芋を掘って食料の足しにしているのを知り、地元の村人達がいつでも山に入ってところ芋を掘ることが出来るように組頭全員と相談するため廻状をまわしたのです。

尚、戸倉の光厳寺書院の庭には三角形の「ところ芋の碑」という石碑があります。この碑文によると天保七年(一八三六)の大飢饉に際し、戸倉山中に自生する蕨<sup>ひかい</sup>（ところ芋＝飢饉の食料）を他村より掘りに来た人々に対し、村人の反対するのにも拘わらず許して掘らせた村長萩原恵亮の徳を<sup>むらおさはぎわらけいすけ</sup> 頌えた詩文で、当時の光厳寺住職<sup>た</sup>栢岩によって書かれたものです。

【ところ芋は鬼野老の根の事で、ヤマイモ科の植物ですが、山芋(自然薯)と違い、その根は苦く通常ではとても食べられるものではなかったのです。飢饉で食べるものがない時、その苦みを取り除く工夫をして村人は飢えを凌いだのでした。】

解説文

廻章

トくら

上田

御組下衆中様

以廻文啓上仕候 先以

末余寒(藏カ)□り御座候得共

時候之御隆りも無御座候

其表各々様方益々御機嫌よく

珍重ニ奉存候 然者諸式高直ニ付

難渋之折柄隣村々最早

葺堀り夫喰足り合ニ

致し候次第も有之 当地之儀も

末々(安)宮方案心不上候ニ付 右

村々同様葺堀初メ致度

由追々役元江申出候者も有之

右二付来ル十九日山中江罷出

右様致し候様御相談有之

候間此段御達し申上候 先者用向而已

早々 以上

(天保二年・一八三二年)

卯歳正月

組頭

常五郎

角左衛門

啓輔

賀右衛門

長右衛門

幸七

源六

源兵衛

善太郎

忠左衛門

賀右衛門

太郎助

勇太郎

廻章

廻文をもって申しあげます 先ず、いまだ寒さが遠のきませんが、それほどの厳しさもなくなりました 皆々様方にはますますご機嫌よくおよろこび申し上げます さりながらいろいろな品物の値段が高く困難なこのごろ 隣の村々では蕨薺(ところ芋)を掘り既に食料の足しにしているという事があります

私どもの村でもこの先の生活も安心できる状況ではないので他の村々と同様に、ところ芋を掘り初めたいとの思いをだんだん村役人へ申出る者もでてきました。 右のような事なので、来る十九日 村民が山中へ出掛けて ところ芋を掘る事が出来る様 御相談致したいと思い 今般ご通知申し上げました。先ずは用向のみにて

早々 以上

巳亥年

上田

河加子云云

陽旦女 啓上 其年 亥

未月 亥 亥 亥 亥 亥 亥

時作 亥 亥 亥 亥 亥 亥

于長 亥 亥 亥 亥 亥 亥

信長 亥 亥 亥 亥 亥 亥

新田 亥 亥 亥 亥 亥 亥

草野 亥 亥 亥 亥 亥 亥

河加 亥 亥 亥 亥 亥 亥

末 亥 亥 亥 亥 亥 亥

村 亥 亥 亥 亥 亥 亥

在 亥 亥 亥 亥 亥 亥

之 亥 亥 亥 亥 亥 亥

信長 亥 亥 亥 亥 亥 亥

河加 亥 亥 亥 亥 亥 亥

卯酉年

組次

長年

南年

信年

長年

南年

信年

長年

南年

信年

長年

南年

信年



「光厳寺境内・ところ芋の碑」天保七年霜月吉日